

## [図画工作・美術]

## 自分を見つめる行為に価値をおいた造形活動

- 高学年における平面と立体の3つの実践より -

梅澤 尚子\*

## 1 はじめに

自由帳を出し、自分の思うように気ままに鉛筆を走らせている子、紙とセロハンテープさえあれば、ちぎってつなげてを繰り返すつまでも遊んでいる子など、休憩時間には、造形活動が自然発生している。その子どもたちは、作品の出来栄を気にせず、つくる過程を楽しんでいる。つくり、つくりかえ、試行錯誤していく行為そのものに価値を見出している姿である。このように手を動かし、材料と向き合い、友達と語り合い、創作に没頭することは、子どもたちにとって魅力的な活動であると考えられる。

しかし、10歳を過ぎた5、6年生という高学年になってくるとその活動に浸り、思いつくままに造形することを好むと同時に、自分のつくるという行為やできる作品に「どのように表現したのか」意味づけしにくくなる時期でもある。「作品の出来栄は、気にしなくていい」と言っても自分の行為の結果である作品を気にするようになってくる。その要因として主観的に没頭する自分とそれを客観的に見る自分が出現してくることが考えられる。「何かを喋ったり、書いたりするといった運動出力をする大脳皮質の運動野や運動前野を中心として構成される私と、その運動出力の結果を知覚する大脳皮質の感覚前野を中心とする私は、別の私である。日記を書く私と、それを読む私は違う私である。」<sup>1)</sup>と茂木健一郎氏も述べている。つくる私とそれを見る私とのギャップが顕著になってくる。そのギャップから自分の表現に自信がもてない子どもも多いのではないだろうか。高学年の図画工作においては、他者や既成の尺度と比べて自分が劣っていると思ひ込み、「うまく描けない、つくれぬ」と自信喪失になっている子どももいると考えられる。また、高学年の子どもたちは、思春期の入り口であり「自分らしさ」を模索し始めている。「あなたのいいところを言ってごらん」と投げ掛けても、なかなか自分の長所を言葉で述べるできない。自分で自分のよさを言葉にすることに抵抗を感じ、自己肯定感が低い傾向にある。

そこで、そのような発達特性が顕著になってくる高学年の子どもたちに、つくる過程やできる作品に「自分は自分のままでいいのだ」「ここに自分を表したのだ」という「自信」や「誇り」をもたせることのできる題材はないものかと考えた。「自分を見つめる」ことから始め、その行為としての表現と形（作品）との関連性や子どもたちの取組の様子を見取っていくことによって、高学年の子どもたちにとっての有効な表現の方策を探っていきたい。

## 2 研究の目的と方法

本研究では、「自分を見つめること」の価値や定義を明確にした上で、その行為を実現する有効な方策を工夫するとともに、具体的な児童の姿より自分を見つめる行為と形（作品）との関連性や制作過程に及ぼす影響について検証していくことを目的とする。

## 3 研究の内容

## (1) 「自分を見つめる」ことの価値

「自分を見つめる」ことの価値について、押見輝男氏は、「人は、自己フォーカス（自らが自らに注意を向ける心理過程）が高まると、自分の信ずる価値観にしたがって振る舞うようになるという点で、主体的になり、自分の行動を自ら納得しながら行うようになるという点で、自覚的になるのです。」<sup>2)</sup>と述べている。自己フォーカス、言い換えると「自分を見つめる行為」が保障されると「自分の信ずる価値観にしたがって振る舞うようになる」と解釈できる。その点において、子どもたちに「自信」と「誇り」をもたせることのできる行為だと言える。また、佐々木達行

\* 上越市立戸野目小学校

氏は、「教育をとおして人生を問い、豊かに生きようとする子どもたちを培っていくために、まず、彼らの自己確立の問題は、避けておれない。それは、自らの存在を意識し、確認し、主張し、表現することとおして、生きる意味や価値を問い、価値観や人生観を培っていくとする原点となるからである。つまり、自己確立とは、自分自身を見つめ、そのよさを求めたり、見つけたりしながら『自分らしさ』(identity)として主張し、表現することとおして常に広げられ深められていく。<sup>3)</sup>」と述べている。「自分を見つめるということ」は、佐々木氏の言う「自己確立をすること」であり、生きる意味や価値を問い、価値観や人生観を培っていくとする原点になるということである。

上記の2氏が述べていることにより、図画工作で「自分を見つめて」表現していくことは、単に知識や技能が習得されるのではなく、価値観や人生観、行動、自覚までにも影響を及ぼし、「自分は自分のままでいいのだ」という自己肯定感を高め、豊かに生きる子どもを育てることにつながると考える。

## (2) 「自分を見つめる」ことの有効性

「表現に自信がもてない」子どもたちを「自分は自分でいいんだ」「納得した」と思える子どもたちにするために、本研究は「自分を見つめる」行為を保障する。その有効性について、下の図のように考える。

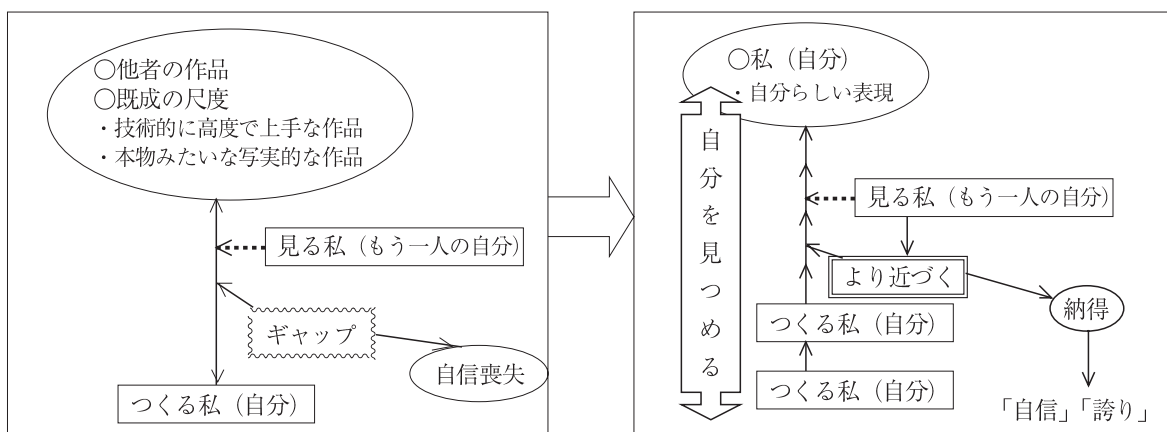


図1 「表現に自信がもてない」状態

図2 「納得した」状態

既成の尺度である「技術的に高度で上手な作品」「本物みたいな写実的な作品」をつくるのが到達地点になり、それに近づくために造形していくと、その作品を見るもう一人の自分がつくる自分との「ギャップ」を感じ、自信喪失となる。(図1) 自分を見つめることによって「私(自分)が表現できた作品」を到達地点にし、それに近づくために造形していくと、つくる自分が常に「自分が考えたように自分が表現できたか」と問うため、自分らしい表現により近づき、それを見るもう一人の自分も「納得」し、満足感によって自信と誇りがもてるのではないかと考える。

## (図2)

このことから、「自分を見つめる」ことから始めることは、有効だと考える。

## (3) 「自分を見つめる」定義

「自分を見つめる」と一口に言っても、その定義が曖昧である。物理的に自分で自分を見ることは、鏡にでも写さない限り、不可能である。本研究における「自分を見つめる」とは、「自らが自らに注意を向けること」とし、外見ではなく、内面に焦点を当てていくこととする。

この定義に従って次の3つの「自分を見つめる」という行為を検証していく。

- ① 「現在の自分」について幾つかの観点から特徴を洗い出し、「自分自身を取材する行為」
- ② 「想像の世界の自分」について思いを巡らせ、「自分自身と対話する行為」
- ③ 「過去の自分」について時、場所、人、心情、感覚等を思い出し、「自分自身を回想する行為」

## 4 実践の実際

### (1) 実践1

「現在の自分」について幾つかの観点から特徴を洗い出し、「自分自身を取材する行為」の実践

「～もう一人のわたし～ マイキャラクターをつくろう！」(平面・6年生)

#### ① 自分を見つめる行為に価値をおいた教材としての特性

この実践は、現在の自分に焦点をあて、「自分自身を取材する行為」を「自分を見つめること」とした。具体的には、まず、取材する観点を与え、それによって言葉で答えていく。そのことによって自分自身を多面的にとらえるこ

と（取材）ができると考えた。方策としては、様々な角度から取材するために自分を中心に据え、周りを自分に関する観点で囲んでいく「わたして…カード」を準備した。（図3）また、自分で自分のことについて言葉で取材することが困難な子どももいるため、友達から自分の「よさ」についてカードに書いてもらい、手元に置いておくようにした。自由覧を設け、決められた観点だけではなく、自分しか知らない一面も書けるようにした。

現在の自分を形に表すことについては、自分の内面を写實的に写すのではなく、置き換え、デフォルメ、装飾、単純化、記号化する等して、もう一人の自分を平面に表現する。マイネーム（名前）と同じように、できあがった「マイキャラクター」は、自分自身を象徴するものであり、言葉や説明が通じなくても自分を相手に伝えることができる点で他者とのコミュニケーションが図れることも期待できる。「何を表したいのか」を明らかにしながら表したものと形が合致するようにラフスケッチを繰り返し、最後は、一つに絞り、本描きをする。

## ② 指導計画

- キャラクターの意味や既成の作品を知る。
- 自分を様々な角度からとらえ「わたして…カード」を作成する。
- 「わたして…カード」をもとに「マイキャラクター」のラフスケッチをする。
- 幾つかのラフスケッチの中から「とっておきの一枚」を決め、本描きする。
- クラス全員の作品を集め「マイキャラ図鑑」をつくる。

## ③ 活動の実際

### ア 構想カード「わたして…カード」の取材する観点

|              |            |                      |
|--------------|------------|----------------------|
| ぼく・わたしの性格って… | 何かに置きかえたら… | ずっといっしょにいたいものは…      |
| 好きなもの・ことは…   | くせ         | 「こうなりたい」という理想やあこがれは… |
|              |            | 自由欄                  |

### イ わたしてカードにおける自分取材から形への過程の実際

友達から性格やよさについて「メッセージカード」を書いてもらい、各自の手元に置くようにした。R児は、友達から「すごくやさしい」というメッセージをもらい、「性格」の欄に恥ずかしそうに書いていた。M児は、野球の大会で敢闘賞をもらったことを自分で「自慢欄」を作り書いていた。自分の書きやすい項目から埋めていく子が多かった。

ラフスケッチの段階になると、子どもによって過程が様々であったが、どれも認めていくようにした。「思い」と「形」の間を行ったり来たりする思考回路や試行錯誤する制作過程を大切にしたい。

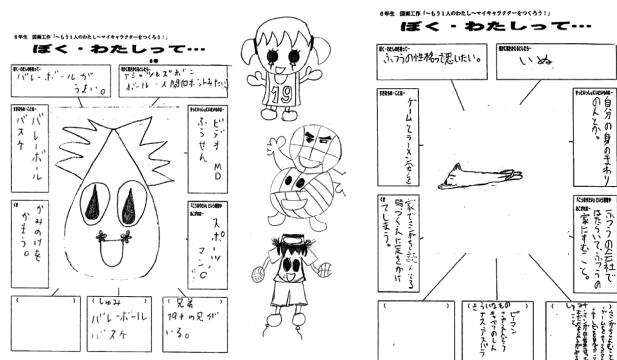


図4 H児カードと4枚のラフスケッチ

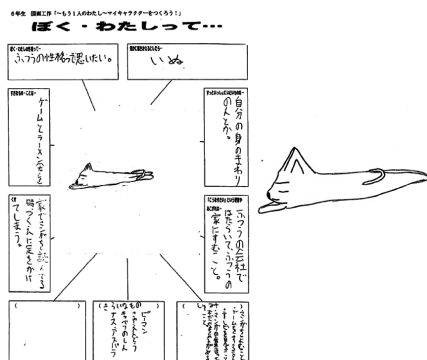


図5 S児カードと本描き

S児は、カードの項目を楽しみながら殆ど埋め、ラフスケッチでは、寝そべっている犬のキャラクターをたった1枚だけ描いた。しかし、その1枚にかけた時間は、相当なものでS児の思いの深さを感じるものであった。（図5）E児は、あまりカードの項目を書かないうちにラフスケッチに入った。

図書委員長としての自分、本好きな自分を単刀直入に「本」に置き換え、鏡を持って舌を出しているユーモア感のあるキャラクターを描いた。その後、「ずっといっしょにいたいもの」を「鏡」、「くせ」を「舌ペロを出している」とカードに書き加えた。（図6）I児は、「カエル」と「釣り」を中心に、「いつもニコニコしている」という自分の性格をカエルの「目」に表現していた。（図7）

「自分らしく」「形が気に入って」「ずっといっしょにいても飽きないもの」などの角度からラフスケッチを見直し、最終的にとっておきの1枚が決定した。A4サイズの厚紙に適当な大きさに輪郭をマジックで明確に描き、彩色の際

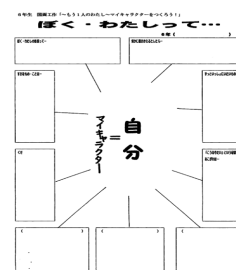


図3 わたして…カード

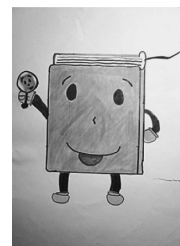


図6 E児の本描き

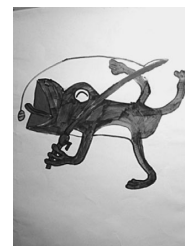


図7 I児の本描き

には、むらができないようにマジックやポスターカラーでべたに塗るようにした。できあがった作品を見てN児は「みんなの考えたマイキャラクターは、どことなくその人に似ている」と発言した。クラスの人気分の40種類のキャラクターを貼り合わせ「マイキャラ図鑑」を作成した。(図8)文化祭に展示し、広く保護者や地域の方に鑑賞してもらった。

## (2) 実践2

「想像の世界の自分」について思いを巡らせ、「自分自身と対話する行為」の実践  
「もう一つのわたしの世界 ～ボックスアート～」(立体・6年生)

### ① 自分を見つめる行為に価値をおいた教材としての特性

この実践は、「想像の世界の自分」について思いを巡らせ、「自分自身と対話する行為」を「自分を見つめること」とした。具体的には、25cm×25cmの箱の中に自分だけの空想の世界をつくった。自分の行きたい架空の場所、自分の写真の切り抜き、そこでの身の置き方、材料などを考え、カードにアイデアスケッチをする。ここでは、大まかな計画であって、想像の世界の自分を見つめる行為は、箱を目前にして実際につくっていくときである。アイデアスケッチをもとに多様な材料、色、形、配置を工夫しながら、一つの独自の世界をつくり上げ、形にしていく。自分自身と対話しながら、つくりつくりかえていく行為そのものが自分を見つめる行為である。

想像の世界の自分を形に表すことについては、箱の中という空間の制限はあるものの、材料の制限はなく、表現に適したものを自分で準備したり、教師側で準備したものの中から選んだりしてつくるようにした。

### ② 指導計画

- 25cm×25cmの箱を見て、その中にどんな世界を表現しようか想像を膨らませる。
- 箱の大きさ、自分の写真の位置、全体の配置、材料を考えながら、アイデアスケッチをする。
- 自分の使う材料を準備し、箱の中に自分の世界をつくる。
- クラス全員の作品(25cm×25cmの箱)を積み重ねて展示し、「ボックスアート展」を開く。

### ③ 活動の実際

#### ア アイデアスケッチをする際の観点

どんな世界    どこにいるのか    どうやって配置するのか

#### イ アイデアスケッチをもとに自分自身と対話しながら形をつくるの過程の実際

どんな世界で、自分はどのようにしているのかを繰り返し考えながら、アイデアスケッチから箱の中の制作、制作から思いの見直しと過程が進んでいった。アイデアスケッチの段階で「自分のポーズ」を決めた。そのポーズで一人一人写真を撮った。S児は、アイデアスケッチの段階では、「火山爆発を見ている左向き自分」を計画し、そのポーズで写真を撮った。しかし、つくっている過程で、火山爆発の方向が当初の計画と変わり、自分の身の置き場所も向きも変えなければならなくなり、「右向きの自分」になるように写真を撮り直した。自分の想像の世界にこだわり、自分の思いに合ったようにつくり、つくりかえていく姿であった。R児は、「海底の怪物」という世界で大きなタコが沈没船を抱え込み、自分もその近くにいるというアイデアスケッチであった。材料は、紙粘土であり、細かい所まで粘土でつくろうという計画であった。しかし、実際の箱の大きさから紙粘土で全てつくる困難さを実感し、材料を色画用紙に変更した。また、制作過程で海底に沈む船の形や傾斜のおもしろさに興味に移り、船の制作に没頭していった。「船と自分をどのように箱の中に構成するか」を考えながら、時間をかけてつくり上げた。(図9) D児は、「恐竜のいる時代」にすることは決まったが、アイデアスケッチが未完成のままだった。自分の写真も正面を向いて直立しているありきたりなポーズであった。箱と材料と向き合い、つくっているうちに大きな恐竜は箱の正面の壁面に配置し、手前に樹木を置き、その枝に乗って恐竜を見ている自分を表現したいと願った。「後ろ向きの自分」に写真を撮り直し、未完成だったアイデアスケッチに描き加えていた。(図10) 大きな一つの作品としてボックスアート展を開いた。(図11)



図8 マイキャラ図鑑

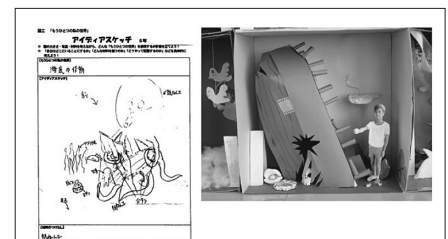


図9 R児のスケッチと作品

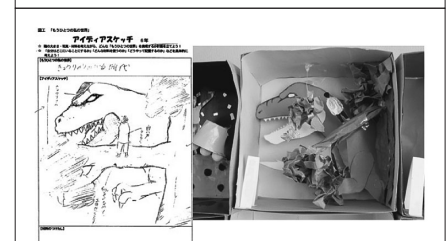


図10 D児のスケッチと作品

(3) 実践3

「過去の自分」について時、場所、人、心情、感覚等を思い出し、

「自分自身を回想する行為」の実践

「わたしの夏休みとっておきの思い出 ～思い出を形にしよう～」

(平面・立体・5年生)

① 自分を見つめる行為に価値をおいた教材としての特性

この実践は、「過去の自分」について時、場所、人、心情、感覚等を思い出し、「自分自身を回想する行為」を「自分を見つめること」とした。具体的には、夏休み中の体験の中から一番思い出深いものを一つ取り上げ、写真や思い出の品物

等を持ち寄り、それを手掛かりにしながら回想する観点に従って過去を振り返り、思い出を形にしていく。「あの時の自分は？」と自問自答しながら、色や形、五感による感触、イメージ等を具現化していく。その「思い出し行為(回想)」がこの実践における自分を見つめる行為である。自分自身だけを表現するのではなく、自分を取り巻く「誰と」「どこで」「どうした」等という観点と「その時」「その空間」での自分の「感覚」や「内面」「思い」を回想していく。

過去の自分を形に表すことについては、表現の制約をなるべくなくし、「自分の思い出を表すためには、どんな形や方法が効果的か」を考えさせ、材料や形態を自由に選択するようにした。

② 指導計画

- 夏休み中のとっておきの思い出を一つ選び、様々な角度から回想する。(「思い出し」カード)
- 思い出を形にするために、具体的な材料や構想のアイディアスケッチをする。(「思い出を形に…」カード)
- 必要な材料を持ち寄ったり、準備された材料から発想したりしながら思い出を形にしていく。

③ 活動の実際

ア 「思い出しカード」の回想する観点

|       |      |     |        |           |           |
|-------|------|-----|--------|-----------|-----------|
| いつ    | どこで  | だれと | 思い出    | その時の「わたし」 |           |
| その時の色 | 見た感じ | におい | 聞こえたもの | さわった感じ    | 全体的にどんな感じ |

イ 思い出しカードとアイディアスケッチをもとにした過去の自分の回想から形をつくる過程の実際

「思い出しカード」によって自分の過去の状況を回想した。夏休みに記録した生活表をもとに記憶をたどる子どももいた。K児は、「名古屋のパレエのコンクールの思い出」を取り上げた。幼少の頃からパレエを習い、夏休みには5日間、一人で名古屋に行きコンクールに参加してきた。華やかなステージの感じとたった一人で緊張感を克服した

苦労などがつぶさに思い出しカードとアイディアスケッチに表現されていた。この行為は、一時的なコンクールの思い出を回想するだけでなく、もっとさかのぼって幼少の頃から続けてきたパレエのことや努力して継続してきた自分を見つめ直す機会ともなった。そのことがカードから読み取ることができる。(図12)

N児は、「ユニバーサルスタジオのジュラシックパークに乗った時」をテーマにした。思い出しカードには、色は「もやもや色」、聞こえたものは「ワイワイガヤガヤ」、さわった感じは「カチカチ」、全体的に「蒸し暑い感じ」、その時の自分は「落下する時に必死でレバーにしがみついた」と書かれ、回想の結果がうまく形に表れていた。空き容器を乗り物に見立て、自分も含めた乗客がレバーにしっかりとしがみつき、声を上げている状況が伝わってくる作品になった。(図13)

T児は、「川中島シアター」に行ったことをテーマにし、そこで見た謙信と信玄の戦いの様子を細かく思い出していた。色は「青と赤」、聞こえたものは「信玄と謙信の兵隊の声」というように合戦の様子を何とか形にしようとしていた。風林火山の旗が印象深く記憶に残り、計画にはなかった旗をリアルに表現していた。(図14)



図11 ボックスアート展

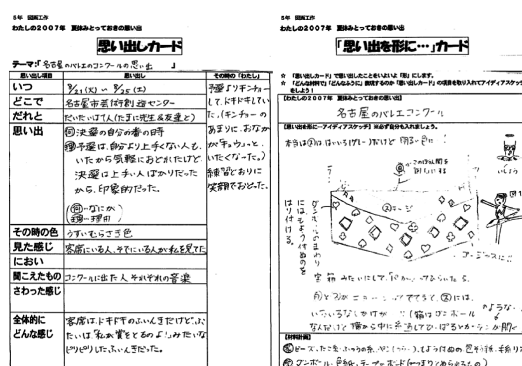


図12 K児の思い出しカードとアイディアスケッチ



図13 N児の作品



図14 T児の作品

## 5 考察

### (1) 成果

3つの実践における共通した成果について以下の3点にまとめた。

#### ① 自分が設定した「自分らしい表現」を目指すため、他者と比べる必要がない。

図工の授業が始まると、子どもたちは、制作途中の作品を自分の机に持っていき、自分のペースで自分がしたいように制作に没頭していた。自分の判断で描き、材料を選び、つくり、つくりかえる造形活動を連続させていくことができた。「こうしなさい」等の指示はなく、支援する際には、「あなたは、どんなふうにしたかったのか？」と問うようにし、自分を見つめた出発点に立ち返り、表現を検討させることができた。また、友達作品と比較して、それを羨望するような姿はなかった。「私は、私の考えたように表現すればいいのだ。」という自己肯定感の伴った造形活動が実現できた。

#### ② 自分で自分を見つめる行為の結果が作品になるため、よさを実感し、かけがえのない自分に気付いていく。

普段自分に注意を向けて生活することが少ない子どもたちにとって、つくることを目的とした上で自分で自分を見つめることは、とても新鮮であった。それと同時に構想カードやアイデアスケッチにおいて「書けない」「できない」という子どもは少なく、多くの子どもが、計画段階で筆が進んでいた。その理由としては、対象が「自分」であるため「知らない」「分からない」ということが少なく、自分自身の中に掘り起こす材料があるからだと考える。自分が、自分らしく表現できたことに喜びを感じられるので、見つめ、つくりながら自分のよさを実感していくことができた。その行為の結果としてできた形（作品）は、世界に一つだけしかない「もう一人の私」であり、かけがえのない自分となる。

#### ③ 受け身の姿勢ではなく、自分の内面から生み出す行為によって能動的に納得しながら表現していく。

到達点が教師側が設定したのではなく、自分で設定したものであるため、全ての思いの出発点が「私」になり、自ずと能動的になる。教師側がもつ作品の出来栄の尺度に近づけるための造形活動は、受け身の意識になりやすい。そうではなく、自分の尺度でつくっていくため、自分が納得するかどうか問題となり、自律的に制作していくことができた。教師の支援がその子どもの「よさ」の発見になり、「～さんらしいね」「～さんの考えたように表現できていいね」などの言葉がけが最適になっていった。そのことによって、子どもたちが「自分は、先生に大事にされているんだ」という気持ちを持ち、図画工作の授業を通して教師との信頼関係や自己肯定感を高めていくことができた。

### (2) 課題

「自分を見つめる」ことに価値を置き、研究してきたが、以下の4点が課題となる。

第一に、「つくる私とそれを見る私」とのギャップを埋めるために今回の研究を行ってきたが、できた形（作品）を自己評価する必要があったことである。「自分が考えたように表現できたか」「納得したか」などについて振り返る時間を設定することは、本研究の有効性を探る手立てとなる。

第二に、本研究は、自分を見つめる行為とつくる過程に価値を置いて検証してきたが、できた形（作品）をただ展示するだけでなく、言葉によって「思い」や「よさ」を他者に伝える場を設定すればよかったことである。そのことによって、互いの「違い」や「持ち味」を実感することができるとともに、自分を他者に理解してもらうよい機会となる。

第三に、教師が造形活動を展開していくそれぞれの段階で一人一人を綿密に見取っておく必要があることである。自分自身を問題とするため、普段から児童理解を深め、誰がどのようなことを取り上げテーマにしようとしているのか、その構想とつくっているものは合っているのか、できた形（作品）は、納得のいくものとなっているのかを評価していくことである。本研究に限らず、このことは、図画工作の授業では重要なことである。

第四に、自分の表現に近づくための技術をいかに支援していくかである。「自分の思ったように表したいのだけれどうまく表現できない」子どもへの適切なアドバイスを実際の姿を見取りながら、タイミングよく行っていく必要がある。

今後も、高学年の子どもに限らず、子どもたちが「自分は自分のままでいいのだ」と自信と誇りをもって構想し、つくり、鑑賞できるような題材を開発し、実践していきたい。

### 〈引用・参考文献〉

- 1) 茂木健一郎 『脳と創造性・「この私」というクオリアへ』 P H P 研究所, 2006年, p136
- 2) 押見輝男 『自分を見つめる自分・自己フォーカスの社会心理学』サイエンス社, 2003年, p140
- 3) 佐々木達行 『授業改革21・自分らしさが輝く図工の活動・新たな活動内容領域の提唱』日本書籍株式会社, 1995年, p11